The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語による東アジアのマッピング : （大）アジア主義
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2012, 2011, p. 19-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77373
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語による東アジアのマッピング――（大）アジア主義

伊勢　芳夫

西欧は、大航海時代以来、とくに 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、イギリスを中心に帝国主義的拡張を行う過程で、単に軍事・政治・経済的支配のもとに被植民地やその周辺地域を支配下に置くだけではなく、言説レベルで、西欧語がそれらの地域を言語化することで覆っていったのである。つまり、ヨーロッパを中心とする世界のマッピングを行っていったのだ。ただし、ここで留意すべきことは、ヨーロッパを中心とする「世界地図」を作成するということが、あるいは、非西欧圏を「他者」として世界地図を描くことが、その地図が不正確であるということにはつながらない。世界システムを構築するためには、「現実」との乖離が大きければ大きいほど、システムの破綻はたちどころに現れてくる。したがって、少なくとも英語の言説形成＝編成においては、絶えざる修正が施された結果、歴史家Ｊ・Ｃ・シーリー(J. R. Seeley) がいうところの「拡大するイングランド」が 18 世紀から 20 世紀にかけて継続しえたのである。そして「西洋中心」的色付けがされているという批判の大合唱があろうとも、科学的認識方法により地政学的・文化人類学的・生物学的に綿密に調査され、体系づけられて形成されたマッピングであり、それに基づいて構築される世界システムは、実際上極めて有効性をもつものと考えられ、現在でも留保つきながら非西欧地域にも受け入れられている。

一方日本は、明治以降欧化主義者により、欧米を経由して入ってきた情報を日本語に翻訳する作業を続けながら、日本はアジアの中では例外的に西欧諸国に匹敵する進歩の潜在力を持つ国と措定して、日本語による世界のマッピングを行ってきた。それに対して、欧米のマッピングの輸入・改良ではないマッピングの試みも同時平行になされてきた。たとえば、1880 年代に、三宅雪嶺が日本を中心としたアジアのマッピングを主張し、また実際に志賀重昂はその目的で「南洋」地域の探検旅行を行ったように、当然ながら日本人の研究者が日本の周辺地域の調査・研究を行っている。また、明治維新以前においても、中国語経由で豊饒な知識が日本に流れ込んできていたのである。そのような過去の情報の蓄積と周辺地域の調査・研究によって得られた情報から、日本を主体とする「アジア」のマッピングを行うとき、果たして西欧語の作り上げた世界地図と同じぐらい「正確な」地図を描いていったのであろうか。

ただしここでいう「正確さ」というのは、普遍的な意味においての――万民にとっての――「正確さ」である必要は必ずしもない。一つには、西欧を中心とする商業、軍事、外交、そして金融の世界システムを維持・運用するための戦略を練り上げるために必要な「正確さ」である。安全な航路、有効な資源、豊富な労働力、外部からの軍事的・政治的侵入の難易度、そして住民の従順度を正確に明示した地図である。もう一つは、西欧白人の人種的・文化的優位を保障する正確で権威あるマッピングを作り上げることである。その「正確さ」があったればこそ、西欧列強は帝国主義的世界展開が可能だったのだ。それでは、果たして同じような「正確さ」が、日本語によるアジアのマッピングにも担保されていたのであろうか。

このようなアジアのマッピングを行った大正期から昭和初期にかけての地図製作者として、北一輝、大川周明、そして満川亀太郎を挙げることは可能であろう。[1]もっとも、この３人に対しては拒絶反応を起こす人もいるだろう。しかしながら、日本の言説形成＝編成の進む方向に与えた影響力の大きさから、取り上げる資格は十分にあると考える。

明治以来、日本の多くの知識人――特に欧化主義者――の世界認識には、「アジア」が隠蔽・歪曲されていたのであった。しかしながら、（大）アジア主義者たちは、日本から見たアジア、植民地化されたアジアの独立ということについて、大正期から研究し、発言を続けてきた。確かに大川がいうように、[2] 彼らの声は決して日本の論壇では大きくはなかったが、しかし確実に根を張っていったものと思われる。さもなければ、太平洋戦争の直前になって急にもてはやされるようになるというのは、戦争に利用されただけという理由だけではいささか不自然であろう。

猶存社に所属していた北一輝、大川周明、そして満川亀太郎に共通するのは、日本を中心とする興亜思想であった。また、大川と満川に共通する点は、インドをはじめ欧米の植民地になっているアジア地域の独立を擁護する主張であった。その意味では、大川と満川が大アジア主義者であるのに対して、北はむしろ国粋主義者といっていいかもしれない。しかしながら、中国に滞在していた北を猶存社に呼び寄せた大川と満川は、北の中国に対

---

[1] このようなマッピングを試みた著作は、竹内好も「この戦争の時期には、大アジア主義を名のる書物が非常にたくさん出た」というように、太平洋（大東亜）戦争の数年前から、多く出版された。竹内好編、『現代日本思想体系　9　アジア主義』、（筑摩書房、1963）、p. 15 を参照。

[2] インド哲学の研究者でもあった大川周明は、彼の『復興亜細亜の諸問題』昭和 14 年再版の巻頭「ことわり」で、以下のように記している。「本書が初めて印刷に附せられたのは、序文によって知らるる如く、実に大正十一年の初夏、指折り数うれば十有八年の昔である。そは予の自余の著述と同じく、極めて少数の熱烈なる同志を得ただけで、殆ど世の顧みるところとならなかった。然るに近来アジア問題が漸く世人の関心を惹くに及び、偶々この書を一読せる明治書房主人高村有一君の真摯純一なる魂が、本書に潜み流がるる精神に共鳴して、切に本書の再販を要望し、その熱心は遂に予をして承諾を余儀なくするに至らしめた。」この大川の回顧文から分かるように、日本のアジアに対する関心の高まりは、太平洋戦争直前のことであった。大川周明、『復興亜細亜の諸問題』、(中央公論社、1993)、p. 15。以下の『復興亜細亜の諸問題』からの引用は、この版のページ数を本文に記入。

する認識に強い影響を受けている点などを考慮すると、同列に見ることも可能であると思われる。

先ず、同時代のアジアについての彼ら 3 人の情報源であるが、中国に関しては、日本軍や日本企業が常駐するだけでなく、「大陸浪人」といわれる日本人たちが中国各地で政治的にコミットし、また上述したように、北一輝は中国で辛亥革命に深くかかわっており、中国情勢には極めて明るかった。それでは、彼らが中国についで最も関心があった英領インドについてはどうであろうか。インド哲学の一学究の徒であった大川周明が、大正元年ごろ「現在のインド及びインド人」に初めてであったときの事情が、『復興亜細亜の諸問題』の冒頭で述べられている。それは、彼が神田を散歩しているとき、ふと一軒の古本屋の店頭でみかけたサー・ヘンリー・コットン(Sir Henry Cotton)著『新インド(*New India or India in Transition*)』という 1 冊の本との出会いで始まった。コットンは、祖父も父親もインド高等文官(Indian Civil Service)の役人であり、彼自身も 35 年間勤めあげたイギリス人であった。[3]

> この時に至るまで、予は現在のインドに就て、殆ど何事も知らなかった。インド思想の荘厳に景仰し、未だ見ぬ雪山の雄渾を思慕しつつ、娑羅門鍛錬の道場、仏陀降誕の聖地としてのみ、予は脳裏にインドを描いて居た。然るにコットンの著は、真摯飾らざる筆致を以て、偽る可からざる事実に拠り、深刻鮮明にインドの現実を予の眼前に提示した。この時初めて予は英国治下のインドの悲惨を見、インドに於ける英国の不義を見た。予は現実のインドに開眼して、わが脳裏のインドと、余りに天地懸隔せるに驚き、悲しみ、而して憤った。予はコットンの書を読み終えたる後、図書館の書庫を渉って、インドに関する著書を貪り読んだ。読み行くうちに、単りインドのみならず、茫々たるアジア大陸、処として白人の蹂躙に委せざるなく、民として彼等の奴隷たらざるなきを知了した。（『復興亜細亜の諸問題』、18）

一方満川は、大正 6 年 8 月の文章の中でインド問題の重要性に触れながら、インドに関する日本語の情報の少なさを嘆いている。

> 此の如き二個の連鎖に依りて日印間の關係は決して輕視す可らざるものあり。否我國民は盆々印度の事情を研究調査して、一は友邦との盟約に副ふべく、一は貿易に由りて日印兩者の親密を期せねばならぬに拘らず、我國に於て見るべき機關としては大隈侯爵を會長とせる唯一の日印協會あるのみ――而して其機關雜誌たる會報は會員外たる吾人が見たいと思つても、帝國圖書館にすら備付が無い有様である――書物としては十年前外務省にて編纂せし『印度事情』と最近出版せられし佐野甚之助氏の『印度及印度人』との二册を除いて一般事情を知ることが出來ない程の憐れなる状態である。[4]

---

[3] Henry Cotton, *New India or India in Transition* (London: Kegan Paul, 1907, rpt. Bibliobazaar), p. vii.
[4] 満川亀太郎、『奪はれたる亜細亜』、(東京：広文堂書店、1921)、pp. 189-90。

このような大川と満川の証言からわかるように、当時の「現在のインド」に就いての情報は、欧米の研究書か、アングロ・インディアンによる著書か、欧米の通信社が配信するニュース報道からのものがほとんどであった。この事情はインド以外の地域においても大差はなかっただろう。つまり、当時の日本人の世界認識は、英語を中心とする西欧語による情報によって構築されていたのであった。そして、日本人のアジア観が形成される際に、そのことは非常に深刻な影響を与えていたと思われる。しかしながら、それについては本論の最後で問題にすることにする。

それでは次に、北、大川、そして満川が、中国、そして植民地アジアに対してどのようなまなざしを向けていたのかを、彼らの著作を分析することで検証する。

先ず北一輝の中国観をみてみよう。

北一輝は、明治 44 年 10 月に中国で辛亥革命が勃発するや、革命家・宋教仁の招きで 11 月に中国にわたり、上海駐在日本総領事からの 3 年間の国外退去命令が出されている期間を除き、昭和 8 年まで中国に滞在した。帰国したのは、『支那革命外交史』——最初、『支那革命党乃革命之支那』というタイトルであった——を読んで感銘を受けた満川と大川によって猶存社に入ることを請われたためであった。[5]

北は、彼の眼前で起こっている中国革命が、清朝を倒し、中央集権国家として再生することを期待した。そのことが、ゆくゆくは東アジアの復権につながると考えたのだが、しかしながら、中国人革命家の努力を称えながらも、北の理想の革命とはかけ離れた結果になったことに対して、『支那革命外交史』(1921) において、孫文と袁世凱の二人を批判の標的にする。

革命の勃発時にはアメリカに滞在していた孫文は、中国に帰国して、設立された国民党の初代理事長に就任するが、北は、孫文の中国革命に対する考え方を否定する。

> 孫君の支那とグッドノー[Frank Johnson Goodnow : 中国政府の憲法に関するアメリカ人顧問]の米國とは全然建國の精神より別個のものなり。北米の建國は君國を捨つるも自由に背く能はずとなし、信仰の自由のために君國に容れられずして移住せる者の子孫。自由の郷は米人の國民的誇にして清教徒の血液は移住者の多きに從ひて濁れりとも自由は彼の歴史を一貫せる國民精神なり。支那は之に反して全く自由と正反對なる服從の道徳即ち親に服し君に從ふ忠孝を以て家を齊へ國を治め來れる者、被治的道念のみ著しく發達せる歴史の下に生活する國民なり。彼れの建國は一粒選の自由移住民にして此れの歴史は數千年間鞭打の奴隷なり。斯く建國の精神より異にし歴史的進行の方向を同ふせざる兩國民の上に、其の一の飜譯を以て他を包被せんとする孫君の空想は、敢て米人の論辯を待たずとも自覺せる革命黨の疾に知悉せる所なり。[6]

---

5 松本健一、『北一輝論』、(講談社、1996) の年譜参照。

6 北一輝、『北一輝著作集 II 支那革命外史 国家改造案原理大綱 日本改造法案大綱』、(みすず書房、1959)、p. 7。以下の『支那革命外史』からの引用は、この版のページ数を本文に記入。

北は、中国革命の手本としてアメリカ独立戦争を措定する孫文に対して、空論であると決め付ける。なぜなら、アメリカは宗教的に迫害された移民者の国家で、その建国の精神として「自由」が大前提になっており、そもそもの国の成り立ちが中国とは異質なのだという。それでは、中国はどの国をモデルにすべきなのか。北によると、それは日本だという。

> 問題は別個に提起せらるべし。曰く、果して孫逸仙[孫文]の米國的理想に影響せられずとせば支那の革命は如何なる思想に原因するかと。不肖は少くとも此の一點に於ては十分の信念を以て答ふ。曰く支那の革命は太平洋の遙なる雲間より來らずして對岸の島國、實に我が日本の思想が其の十中の八九までの原因を爲せるなりと。隣國を革命黨の策源地と視革命の扇動者なりと猜するは固より當らずと雖も、日本は爾が與へたる思想に對して責任と榮譽とを感ずべし。
>
> 不肖は此の重大なる事實が未だ殆ど日本其者に自覺されざるを視て、佛蘭西革命に與へたる英國の思想を對岸の島國自身が終に自覺せざりし歴史の反復に驚かざるを得ず。(『支那革命外交史』、14)

かなり強引なパラレル関係の構築は北一輝の文章にはよくみられるのだが、ここでは、日本と中国の関係が、イギリスとフランスの関係に重ねあわされ、フランス革命にはイギリスの思想の影響があるように、中国革命には日本の影響があるという。その影響とは、清朝によって日本に派遣された中国人留学生を教育したことによって与えられたという。

> 日本が十年前の始めに於て隣國青年の教導を引受けしは固より革命の意味ならざりしにせよ、支那自らが自立獨行すべき一國家としての存立が日本の利益の爲めにも希望せられたるに基く。然らば彼等青年が國家の榮辱に敏感となり國權の得喪に活眼を開き得たるは日本の希望せられたるものにして、亦實に亞細亞の盟主たらんとする教導者の誇に非ずや。(『支那革命外交史』、28)

日本において「国家的覚醒統一要求の真精神」を学んだ中国人の革命は「厳然たる東洋的共和制」を目指すべきであるにもかかわらず、孫文はアメリカの制度を翻訳して取り入れようとしているという。北はそのような孫文を強く否定し、「日本精神」を受け継いだ革命家を賞賛する。

> 即ち日本的思想により國粹文學によりて已に國家的覺醒統一要求の眞精神なくんば、米國制の非國家的分立的飜譯は當時の孫君の光輝と群集心理によりて新共和國に禍因を播ききしやも知るべからざりしなり。不肖は日本的思想の勝利を悦ぶ日本人たる立場よりも廣く

東洋民族の誇立ちて、覺醒せる東洋精神が斯くの如く悉く恣に歐米の長短を取捨しつゝありしを視て滿腔の欣快を感じたる者なり。(『支那革命外交史』、63)

北は、「日本的思想」によって東洋民族に「東洋精神」を覚醒させたと誇らしくいう。しかしながら、彼が中国革命のあるべき姿を描き出している箇所では、明治維新ではなくフランス革命のイメージを再三使っているのである。北の23歳のときの著書『国体論及び純正社会主義』では、日本という文脈で「日本的思想」を描いていたのかもしれないが、アジアという文脈において、果たして彼は何らかの具体的な思想を構築できていたのであろうか。少なくとも、『支那革命外交史』ではみえてこない。

次に、「単り[ひとり]インドのみならず、茫々たるアジア大陸、処として白人の蹂躙に委せざるなく、民として彼等の奴隷たらざるなきを知了」した大川周明が、いかに英領インドの歴史を描き出したかをみてみよう。

まず、イギリスの従属民であるインド人が、イギリスから不当な人種差別を受けている状況を、大川は第1次世界大戦でヨーロッパ戦線に従軍したインド人の負傷兵の待遇を描くことで日本人読者に認識させようとする。

彼等は重症を負うて痛苦に呻吟しても病院に収容されなかった。若し手当てを加えても、再び戦場に立ち得ざるほどの重傷者は、悶えて死ぬが儘に放置された。ただ白人兵士を収容して、尚お余裕ありし時にのみ軽症者を収容し、傷癒ゆれば直ちに駆って再び戦場に立たせた。彼等は一切の残虐を忍び、艱難に堪えて、唯だ戦後に確立せらる可き正義を期待した。(『復興亜細亜の諸問題』、39－40)

もっとも、そのような不当な扱いを受けてきたインド人にも国民的自覚は芽生えており、その早い現われが「インドの大反乱」であった。そのような国民的自覚に「希望と勇気」を鼓舞した重要な事件は、日露戦争での日本の勝利である。日本の勝利は、世界の被抑圧民に革命（独立）の契機を与えたと大川はいう。

この国民的自覚は言うまでもなく政治的方面に現われて、政治的改革乃至革命運動を促成した。即ち一八五七年には、インド志士が「独立の第一戦」と称する大叛乱の勃発を見、北インド全部を騒乱の渦中に投じた。一八八五年にはインド国民議会の組織を見た。而して前世紀の末葉、東アフリカの一角に国を成せるアビシニアが、能くイタリア軍を撃破してその不当なる侵略を斥け、次で現世紀の初頭新興日本が強露を撃破せることが、ヨーロッパ圧迫の下に呻吟する諸弱小国に絶えて久しき希望と勇気を鼓舞し、世界に於ける隷属国民の血を怫然たらしめた。そはアジア復興の暁鐘として先ずトルコ革命を招徠し、次でペルシャ革命を生み、更にインド及びエジプトに於ける国民運動を激成した。インドの政治的運動が頓に緊張の度を加え、或は英国貨物を排斥する国産運動（スワデーシー）とな

り、或は英国政府の覇絆を脱せんとする自治運動（スワラージ）となり、更に極端に走りては、爆弾と短銃と匕首とを以てする政治的暗殺となって現われたのは、実に日露戦争以後のことに属する。嘗てツルベツコイ公爵、その著『強国としてのロシア』に於て、日露相戦うに至らしめたるものは英国外交並にその新聞紙なりとし、「英国の日本と結べるは、一面露国を疲弊せしむると同時に、他面日本の勢力を殺ぎ、以て極東に於けるイギリスの地位を確乎たらしむるに在った。而も英国は日本の勝利が、その他の方面に於て如何なる影響を世界政局に及ぼすかに就て、毫も想到する所なかった」と述べて居る。然り、日露戦争の結果、インドの家々の神壇に明治天皇の御真影が飾らるるに至ろうとは、イギリス政治家の夢想だもせざりしところ。(『復興亜細亜の諸問題』、82－3)

上記の文章を書かせる大川の心の中の思いは、3つあるであろう。1つ目は、被抑圧民に対する同情と共感である。2つ目は、西欧列強に勝利した唯一のアジアの国家であることの矜持である。そして3つ目は、イギリスを「悪者」にしようとする思惑である。「悪」としてのイギリス・イギリス人表象を試みようとしているのである。イギリスが「極東に於けるイギリスの地位を確乎」とするために、日本とロシアを戦わせるように画策したと、ロシア人の口を借りて述べている。そのようなイギリスの悪巧みは、インド統治においても行われていて、インド人の国民的自覚が結集することを阻止するために、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の間にいわゆるコミュナル対立を引き起こす政策を実行する。

さて日露戦争によって鼓舞せられたる、インド国民運動の中心は、英領インドに於て教育最も普及せるベンゴール[ベンガル]州であった。年少気鋭のベンゴール青年は、屡々集会を催して、熾んにインド独立を演説した。ここに於て時の総督カーゾン卿は、東部ベンゴールに回教徒多きを利用し、以てインド人の勢力を牽制せんとし、ベンゴール州を東西両部に分割せんと画策した。(『復興亜細亜の諸問題』、83)

また、独立を志向するインド人学生に対して、インド政府は「苛酷なる迫害を加え、将来国民運動に加わる者は、直ちにこれに放校を命じ、一切の教育を受くることを得ざらしむ可しとの命令」を発して押さえつけようとするが、却って、「国民大学運動」がおこって、インド人自らが教育に関与していく契機になったと大川はいう。この運動においては、以下のようなインド人のための教育が計画されたのであった。

ベンゴール州有志は、国民教育会議を開き、全然政府より独立せる大学を創設し、純乎たる国民主義の下に哲学・科学・文学乃至工芸に関する教育を施さんと計画し、盛んに州内を遊説して熱心なる賛成を得た。この計画に於て最も注意すべき一事は、従来インド諸学校に於て、最も重要なる学科なりし英語を第二語学となし、これに代うるにベンゴール人にはベンゴール語及び梵語を、回教徒にはウルドゥ語・ペルシャ語及びアラビア語を以て

第一語学たらしめんとせることであった。吾等はこの事に於て、最も明瞭にインドに於る国民的自覚の正しく且強気を見る。(『復興亜細亜の諸問題』、83)

大川は、今や暗殺やテロという暴力手段を用いて独立を勝ち取ろうとするインド人の新たな動きを力説するのだが、一方、別の動きをもインドに関する章の最後に付け加えている。

インドはガンディに導かれて新しき時代に入るであろう。ガンディが徹底してインド的理想を掲げ而してインド的手段によって、その実現の歩を進めつつあることは、吾等に取りて深刻なる暗示を与える。今や世界最大の革命家は、まがう可くもなくレニン及びガンディである。而してこれらの両人ほど、特異なる対立をなせる性格は無い。予は更に他の機会に於いてこれら両者の対比によって、露国及びインドに於ける革命の本質を闡明し、これによって来るべき世界革命の本質を揣摩したいと思う。革命行程のインドに関しては、今や唯だ主としてその外面的発展を叙して筆を擱く。(『復興亜細亜の諸問題』、113)

猶存社の中心人物である満川亀次郎は、昭和11年に没しているために、二・二六事件の黒幕として銃殺された北一輝同様、太平洋戦争直前から彼らの大アジア主義が「大東亜共栄圏」として日本の言説形成＝編成のコアになることを予想しなかったであろう。

満川の『奪はれたる亜細亜』(1921)は、彼が新聞記者出身ということもあり、論旨明快であるのだが、それだけ、北や大川の文章のもっている激しさや、強烈なアンビヴァレントさに欠ける。

内容的には、『奪はれたる亜細亜』は、北と大川のいっていることとほとんど重複している。たとえば、北一輝同様、中国革命の意義と必要性を説明するが、北ほどの強烈なコミットメントや、革命の理想を賤しめる者に対する怒り、日本の中国革命に対する無理解に対する憤りは感じられなく、日本人読者に教え諭すような調子である。

以上を論ずるも更に大なる一個の疑問は残るべし、曰く漢民族は果して強固なる新支那を建造すべき見込みありや、支那人は日本人の有するが如き忠君愛國の観念なし、忠愛の観念無き者奚ぞ其國家を興隆し得ん、今日まで日本人は随分南方革命黨を助けたり、然かも之に對しては忘恩排日を以て報ひられたり、支那人は畢竟利己的動物のみ、革命の大手術も之を救濟するに由なし、支那は行く可き所に行かざれば已まず、向ふ所は亡國に在るのみと、吾人は革命の大手術を以て支那を救濟するに足ることを確信する者なるが故に、更に適切に言へば、帝國は支那を助けて其革命を遂行徹底せしめざれば、支那の亡國は支那分割を招き、形勢を再び歐洲大戰前に逆轉し、否それ以上の危機に帝國を瀕せしめ、以て日露戰爭前に見るが如き裸體的國防の地位に置かしむるものなるを憂慮して已まざる者なるが故に、努めて此等の議論を承認せざらんと欲するのみならず又聊か支那の新善分子の

爲に一言の辯護を禁ずる能はざるものあり。世に若し南洋邊に彷徨する我娘子軍や横濱神戸邊に蝟集する通辨車夫の徒を一瞥して日本人は野蠻なり、劣等なり、故に日本は到底興國の資格無き者なりと叫ぶ者あらば何人か沸然として其速斷を鳴らさゞらんや。英國公使パークスは維新前に於ける我國民を目して其怯惰卑劣詐欺を罵り、此の如き國民を有する日本は亡國あるのみと思へり。奚ぞ知らん此亡國民族が明治維新の大火力に會して叩き直さるゝや五十年ならずして今日の地歩を占むるに至らんとは、支那人と雖も同様なり、何人も舊清朝の遺物袁の殘黨を目して興國民族なりと做す者はあらずと雖も、彼等を以て支那人の全部を律し、支那人は到底亡國民族なりと斷ずることは餘りに輕卒に過ぐるもの足るべし、況や一度は亡國民族なりと目せらるゝとも革命の鐵火は之を興國民族に叩き直し得べきものなるをや、支那は我皇室の如き國民尊崇の中心を有せず、即ち忠君とは何を指すやを解せざるも、忠君の念無きが故に愛國心無しとは斷ず可らず、日本流に忠君と愛國との合一を支那に強ゐんとすることは到底不能なるも、何れの國民と雖も其國を愛せざる者無し。支那革命運動を構成しつゝある中心思潮が愛國的観念なることは苟くも支那革命の意義に理解を有する日本人にして一點疑を存せざる所なり。(『奪はれたる亜細亜』、18―20)

イギリスの植民地政策に対する批判や、支配に対するインド人の反発への共感、またイギリスを「悪者」として表象する記述も、大川に似ているが、大川のようにはインド人に自己を投入させずに、距離を保っている。

英國政府が一八五七年大叛亂後印度人に教育を施さんとして創立したる官立大學は、主として法文科の如き形而上の學問を以てし、理工科の如き技藝に關する高等教育は却つて泰西の知識を印度人に移し、經濟上の利益を奪取せらるゝ惧ありとして之を教へざりき。奚ぞ知らん此教育方法は軈て英國百年の禍根を釀成し來らんとは。英國政府は夫の清朝が南清の子弟を國外に留學せしめたると同じく、官費を以て革命の卵を養成しつゝある滑稽事に想倒せざりしなり。カルカッタ、マドラス、ボンベイ等の大學に於て深遠なる哲學、政治學、文學等に醉ひたる印度學生は、その往昔自己の本國が燦然たる文明の光輝を四海に放ちたる壯觀を回想し、茲に憤然毅然として英國に反抗せんとするの精神を發芽するに至り、而して此反抗的精神の全州に蔓延せらるゝや土民亦漸く英國の政治に慊らずして一八八五年印度國民會議をボンベイ市に開催せり。(『奪はれたる亜細亜』、178)

満川の『奪はれたる亜細亜』が北や大川に比べて独創性に欠けるのだが、その論旨が明快であるだけに、中国革命に対する支持や、インド等の被抑圧民に対する共感、そして西欧列強の帝国主義に対する批判に隠された「沈黙」――批判する対象と同じイデオロギーを帯びた――同じ匂いをみつけ出すことは容易である。たとえば、満川は、第 1 次世界大戦終了後、イギリスが更に植民地を増やしたことに怒りを滲ませる。

陸上の元勳たる佛蘭西にして僅かにアルサス・ローレンの回復とカメルン及びトゴランドの獲得とシリアの委任統治權を得たるに過ぎず、我が日本に至つては猫額の青島と叢爾たる南洋諸島を以てして、猶且つ世界の猜視を受けつゝあるに拘らず、英國亞細亞及び阿弗利加に於て其の領土及び勢力を擴張せしことは素晴らしいものであつて、然かも世界の論壇が殆ど聲を潛めて之を默過しつゝあるは、何故であるか、吾人は其の眞意を解することが出來ない。(『奪はれたる亜細亜』、52)

この引用からは、「猫額の青島と叢爾たる南洋諸島」しか取れなかったことを悔しがっているとしか読めないであろう。また別のところでは、イギリス人に比べて日本人は馴化性――たとえ熱帯地方でも、その環境に慣れて生活できる能力――に優れていると、誇らしげに語る。

このような文章に隠された「沈黙」は、北や大川にも見出される。

日本と同じき種族が日本と同じき思想に覺醒せられたるならば後年の事亦日本と同じかるべきこと何の疑いを容るべけんや。不肖は敢て此の南京に於ける一實見を提げて支那悲觀論者の面前に立たんと欲す。(『支那革命外交史』、212)

吾等は自由なる亜細亜を一個の家族に形成せねばならぬ。

而も心が一なる時、體もまた一たるを得る。故に亜細亜を一個の家族に組織するためには、亜細亜の精神を統一せねばならぬ。日本の裡に、また亜細亜の裡に、統一の意識を喚起することによつて、亜細亜的自覺を把握せねばならぬ。而して此の精神的統一は印度と支那とを抱擁せる日本の『三國』魂によつて既に實現されて居る。そは亜細亜が有力たらしむるものであり、来るべき東亜細亜共同體は、この統一的意識の上に築き上げられるべき『三國』である。又は『三國』魂の客観化である。[7]

二つ目の引用は、大川の『新亜細亜小論』からの一節である。この著書が昭和 19 年に出版された事情からか、インドと中国は日本によって「抱擁」される地域へと格下げされている。

本論において、北一輝、大川周明、そして満川亀太郎の、革命による中国の統一と近代国家建設の擁護、及び、アジアの植民地の独立に対する共感を検証した。彼らの主張にまったく真摯さが無かったというわけではないが、確かにそこには、太平洋（大東亜）戦争への道標というか、あるいは、利用されてしかるべき要素が垣間見えるのである。

もっとも、上記の 3 人に帝国主義的貪欲さがあったとは思えない。むしろ、過剰に膨張した劣等感の裏返しとしての誇りが、過度な日本の責務を感じさせたのであろう。また、大川が「現在のインド」に開眼したのは、インド行政官であったイギリス人の著書である

[7] 大川周明、『新亜細亜小論』、(東京：日本評論社、1944)、p. 12.

ということが象徴的に示しているように、彼らのアジアについての知識、植民地の現状認識のほとんどが西欧の言説により注入されたものであり、西欧植民地イデオロギーや人種のマッピングに感染されたままであることは否定できない。したがって、アジアの声を直接聞いていないわけだから、日本を主体にした「正確」なアジアのマッピングを作ることはたやすくなかったであろうと思われる。[8]

しかしながら、彼らが敗戦後に押し付けられた評価は、英米の言説編成のなかで過度に歪曲されたものであると思われる。少なくとも、日本人の中では、例外的にアジアに対して真摯なまなざしを向けていたことは確かである。

[8] 竹内好が『日本とアジア』のなかで、「わずかに北一輝など少数の挫折した先例を除いてまだだれもいないようである」といったように、「日本を主体としてアジアの原理」を発見することは、戦後の日本人にとっても、真剣に取り組まなければならない問題であると思われる。『日本とアジア』、（筑摩書房、1993）、pp. 90－1 を参照。